

稲門地学会会報

巻頭言

稲門地学会会長 坂 幸恭

地球温暖化が進行している兆候でしょうか、世界中で異常気象が異常でなくなりつつある昨今ですが、会員各位には健勝にてご活躍のことと存じます。

7月中旬に鞠子先生の喜寿をお祝いする会が催されました。先生ご夫妻は至ってご壮健で頼もしい限りでした。散会后、あるグループの二次会に誘われました。席上、何かの話のなかで『北海道巡検』と『地質調査』が選択科目となっていることを告げたところ、皆さんが一様に驚き、かつ嘆きました。いわく「自分は地質の途には進まなかったが、地学の学生だという実感を得た」、いわく「クラスの一体感が強まった」…。そして「ぜひ必修に戻して下さい」。先刻来の酒の勢いと懐かしい学生時代への郷愁がそう云わしめたのでしょうか。私もいうまでもなく同伴していた家内の目をかすめて相当量きこしめしていましたから、皆さんの要望に迎合するかたちで応えました。

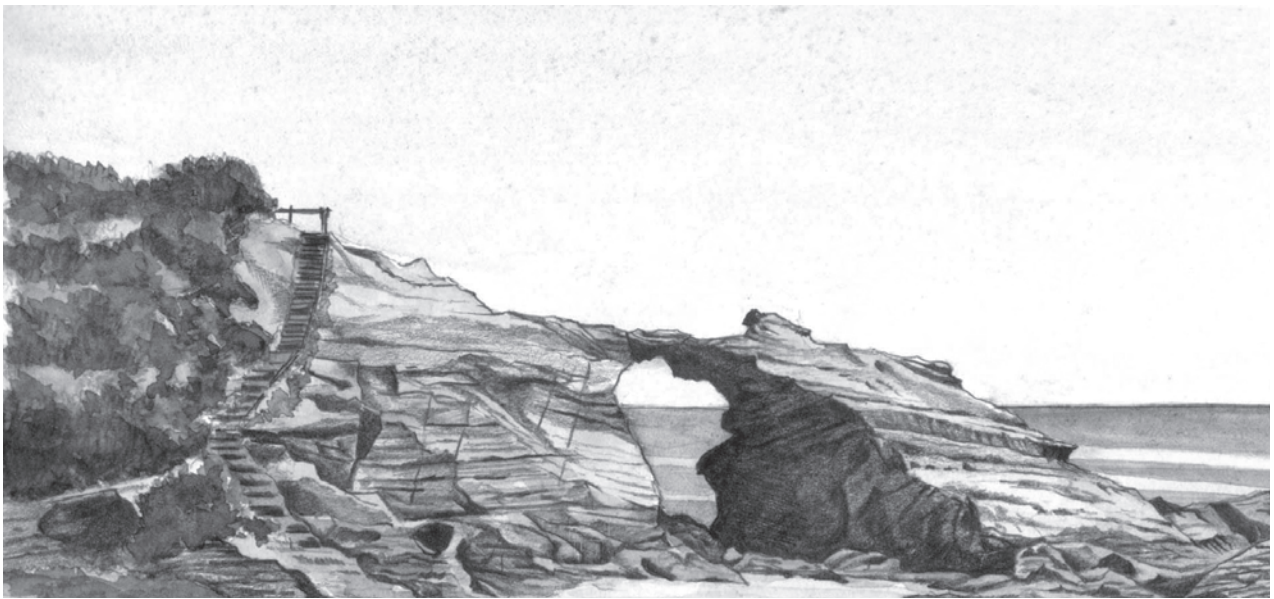
この2科目がまだ必修であった頃から、旧国立大の地質関係教室から巡検や地質調査が消えつつありました。ウチと少数の地方大学だけが‘地質教室’として健全であると内心ほくそ笑んでいました。それを選択制に格下げとせざるをえなかった事情は2つあります。

1つは、将来‘地質’に進む意思のない学生にまで履修させることは、無用の出費と苦行を強いることになる；引率する側にも無為な指導はご免こうむりたいという思いがあります。このことについてはカリキュラム編成上の理念に関わることからなのでこれ以上は触れません。

2つ目の事情、これが小文の主題でもあります。世間の潮流がこの数年の間に大きく変わりました。IT革命、globalizationあるいは学生の学力低下といったことはありません。自由主義を標榜している我が国では、天皇制廃止、核武装論など何を吹聴しても咎められることはありません。ところが、個人情報保護、ジェンダーフリー、不快語追放など新たなタブーが続々と頭をもたげてきました。学籍番号の掲示は禁止、「女らしくしなさい」も駄目で性差別ともなりかねせん。「痴呆症」は「認知症」と改称され、「浮浪者」は「ホームレス」とカタカナ英語ではぐらかされています。監督責任も大きく問われるようになりました。幼児でも溝や崖つぶちが危ないことぐらい分かります、ところが事故が発生すると、適切な措置をとっていなかった管理者が訴えられます。少し長い余談になりますが、子供の頃、私は毎日死線を越えているようなものでした。夏ともなれば、現在は水泳を禁じられている近くの鈴鹿川で遊ぶことだけでした。衛生状態が劣悪な時代で、尿尿は川に垂れ流しでした。そのため上流域で赤痢が発生すると川遊びは厳禁されました。いたずら盛りの悪童がすんなり従うはずはありません。2歳年下の弟とさんざん川遊びをして、身体をすっかり乾かし何喰わぬ顔で帰宅した途端、母親が私たちの行状を看破しました。手足を縛られて鶏小屋に幽閉され、そして夕食抜き。鈴鹿川が黒雲母を含む新期領家花崗岩に源を発していることを知ったのは大学3年生になってからです。地質学を修めたはずのない母が鉱床学の基本を心得ていたのです。

閑話休題。幼少年時代に‘冒険’経験のない学生は自然のなかで身を守る心構えをまったく持ち合わせていません。平気で崖下に座り込み、「蜂だッ」とわめいてダンプカーが往来する車道に飛び出す。そのくせ、鹿と熊しかいそうにない森の中で男子学生が「先生トイレはないでしょうか」。四六時中、危険回避の注意に追われ、地質学の講釈どころではありません。要するに地球科学専修1学年全員を安全に引率する自信を持てなくなったということです。

少子化のせいもあってか、最近の学生は甘やかされ放題です。多くが親や先生に厳しく叱責されたこともないようです。そのため、フィールドでも教場でも頭ごなしに怒鳴りつけることは抑圧ととられます。ある非常勤講師の先生の本務校では、教室で着帽していても私語を交わしていても、注意しないようにと当局からのお達しがあるそうです。短絡的・衝動的な凶悪犯罪が横行する一方で、当らず障らずの、隔靴搔痒のごとき物言いがはびこっています。「ジブンノナカデハそのように考えてイッテもイインジャナイカナアと感じるブブンもあるとイウフウニ…ハ…思います」。政財界の大物から軽薄な芸能人まで同様です。求愛してこんな返答を受けたら、感激しますか、落胆しますか。飾りつけやツマばかりがやたら多く、肝心の食べ物が少ない、安パーティの料理のように、内容が希薄です。これは日本人の美徳である謙譲とは異質のことです。あやふやな物言いは誤解と混乱を招きます。多少かどが立つても思うところを端的に披瀝するべきだと、家人の冷笑を浴びながら憤慨しています。世相を斜めに観る老人の愚痴でしょうか。



城ヶ島馬の背洞門

教室だより : 125 周年にむけて

地球科学専修主任 高木秀雄

今年は5月の連休後7月末まで長い梅雨がようやく明け、巡検やフィールドもなかなか思うように進みませんでした。皆様いかがお過ごしでしょうか。今年から新しくできた鴨川セミナーハウスで1年生のオリエンテーションを始めましたが、5月なのに雨にたたられました。それでは、8年近く続けて来た主任としての最後の報告を行います。

2007年は早稲田大学創立125周年ということもあり、長期にわたって議論されてきた機構改革が具体的

にスタートする節目の年でもあります。たとえば、理工学部は大学院理工学研究科とともに、3つの理工学部（先進、基幹、創造）に分かれ、私たちは創造理工学研究科、地球・環境資源理工学専攻に兼任することになります。教育学部の方は、これまでも報告してきました通り紆余曲折があり、結局理学科は、数学専修が数学科として独立、生物学専修と地球科学専修の2専修で構成されることになりました。また、外国語科と学際コースが合併した複合文化学科がスタートすることになりました。教室では昨年よりスミソニアン研究所から赴任されたフェイガン先生が加わり、隕石を対象に太陽系の起源の研究という惑星科学の分野が加わりました。気さくな人柄もあってか、学生の人気もなかなかのものです。さらに今年度からは大師堂先生が実質的に専修に所属することになり、電波天文学の分野で卒論を開始しています。

教室内の異動では、新井宏嘉助手が任期を終え、いまは非常勤講師をやりながら理工総研客員研究員として研究を続けています。新たに、東大から卒業生の高橋昭紀助手（平野研究室）が助手として加わりました。イノセラムスの研究者です。持ち前の明るさで、教室をもり立てていただけることでしょう。高橋助手は昨年日本地質学会で研究奨励賞を授与されましたが、今年も坂研卒業生の内野隆之君（北大）が小藤賞を、高木研D3の曾田祐介君が研究奨励賞を授与されます。私は地質学界しか知りませんが、教室の卒業生、在学生の活躍は素晴らしいことです。

ところで、2007年度から3年間、ユネスコと国際地質学連合（IUGS）共催で、国際惑星地球年（International Year of Planet Earth）の活動が展開されることはご存知でしょうか。この2008年を中心とする国際年は、昨年12月に国連で宣言されたものです。その中でも10種類のテーマを中心とした科学的活動とともに、様々なアウトリーチ活動がなされる予定です。これと歩調を合わせて、ユネスコが認定するジオパーク（国際地質公園）の設立もすでにヨーロッパや中国で熱心に行われ、国内でも地質学会や産総研が中心となって、国内の地質公園の選定作業に入っています。ユネスコに認定されれば、これは世界遺産に匹敵するものです。このような活動は、衰退しつつある（？）地質学をなんとか盛り返し、社会に役に立つことのアピールを推し進めたいという、世界中の地質学者の願いが込められているように思います。

関連して、最後に宣伝です。教育学部では文科省の教員養成GP (Good Practice) プランが通り、地球科学でも今年講演会を実施します。10月14日（土）13時～16時に、新しく正門前に建った26号館（大隈記念タワー）地階で「日本における地球の科学リテラシーの向上にむけて」というタイトルの講演会を企画しました。2名の招待講演（卒業生の磯崎哲夫広島大学助教授、ジオパーク委員会でも活躍されているNPO地質情報整備・活用機構の岩松 暉先生）と平野教授、円城寺教授のコメント講演および討論会が企画されています。地質学を盛り上げたいと思っている卒業生の皆様、ぜひ早稲田の杜の新しいシンボルにいらして討論会に参加ください。日程が近づいたら、教室のホームページにも宣伝しますので、ぜひ覗いてみてください。



槍ヶ岳を背景に

研究室便り

坂研究室

岡崎一浩 (第 40 期)

今年度の坂研究室は P D 1 名、修士課程 2 名、学部生 5 名の計 8 名です。男ばかりですが、楽しくやっています。

今年の研究テーマは、三重県で「四万十帯」、「秩父帯北帯・黒瀬川帯の境界」、「松尾層群の堆積環境の解析」について、関東で「山中地溝帯」、「名栗断層」について行います。それぞれの大きいテーマの中で地質調査、構造解析、堆積構造、緑色岩岩石学、砂岩組成、放散虫年代などの細かなテーマに分かれて研究しています。

坂先生、P D の加藤さん、助手の太田さんの指導のもと、一致団結して研究活動を行っています。修論生は地質学会発表を控えて今まで以上に気合が入っており、卒論生も先輩に助けをもらいながらフィールド調査やサンプル処理などにがんばっています。

OB / OG の皆様には、お暇な時や大学の近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお寄りいただき、アドバイスなどをしていただければと思います。また研究室は他研究室の人もよく来てアットホームな雰囲気なので、1 ～ 3 年生も気軽に研究室に立ち寄ってください。

平野研究室

須田宏美 (第 40 期)

今年度の平野研究室は博士課程 1 名、修士課程 8 名、学部生 2 名の計 11 名で構成されています。メンバーの人数こそ去年に比べて少なくなりましたが、そこはそれぞれ個性の豊かさと魅力で補って余りあるようです。

さて、夏といえばフィールドです。平野研メンバーの大半は熊と戦うため、いえ、調査のためフィールドに出かけてしまい、研究室は極少人数になります。しかし、秋からはサンプルやデータをたっぷり持ち帰ったメンバーが帰還し、研究室の大黒柱である平野先生の下、再び活気ある個性的な研究室に戻ることでしょう。フィールドは主に北海道ですが、最近では中国も加わり、それらの地域における炭素同位体、渦鞭毛藻や花粉などの微化石、アンモナイト、イノセラムスなどの軟体動物化石、脊椎動物化石、生痕化石、化学合成群集などの研究活動をより広範囲に行っています。

手段・材料は人それぞれではありますが、地球の古環境を推定するというロマンを抱き、先生にお酒も鍛えて頂きつつ、ご指導頂き、さらに、頼れる先輩方や今年から助手としていらっしゃった、研究室卒業生の高橋さんにお世話になり、日々研究に明け暮れ、白亜紀の風景に思いをはせています。

円城寺研究室

松崎英二郎 (第 40 期)

2006 年、円城寺研究室に新しく 7 人の四年生が加入しました。

彼らを加えて現在総勢 20 人 (教授: 1 人, 博士課程: 2 人, 修士課程: 5 人, 学部生: 12 人) の大所帯となっています。在校生、卒業生を問わず、本研究室に関わる人間は皆円城寺教授の大きくて温かい愛によってスクスクと育っています。我々学生にとって、円城寺教授は第二の父親と言えるでしょう。

本研究室では、研究室として掲げる研究テーマはありません。従って、学生は各自で研究テーマを決定する必要があります。そのため我々の研究テーマは多種多様になります。現在進められている研究も、「鉱物中の流体包有物」「火成岩の帯磁率」「廃棄物のリサイクル」などがあります。（正直全員の研究テーマを把握しきれません）

本研究室の学生が日々研究を進めている鉱床学実習室は我々の聖域です。ここは学部生と院生のコミュニケーションのために必須な場所であり、日々親睦を深めています。本研究室に興味がある1～3年生はいつでも気軽にお越し下さい。

小笠原研究室

橋口洋子（第40期）

小笠原研究室は修士課程3名、学部生3名の計6名という少人数の研究室です。メンバー同士とても仲が良く、「ゼミ合宿で島に行きたい!」「研究室名にちなんで小笠原諸島は?」と冗談交じりで話していたことが現実になるほどです（※台風が来なければ9月上旬～中旬にかけて行ってきます）

私たちの研究室のテーマは大きく2つあります。一つは「Kokchetav 変成帯（カザフスタン）産の超高压変成岩類の岩石学的研究」です。地下深部まで沈み込んだ超高压変成岩に含まれるダイヤモンドなどが研究対象で、この研究室から世界初の発見がいくつも出ています。もう一つは「Wyoming Province, U.S.A. に産する大古代基盤岩の岩石学的研究」です。これは実際にロッキー山脈に行ってフィールド調査を行います。2つの岩石学的研究を通じて、地球のメカニズムや歴史を解明していくという大きなテーマを持った研究室なのです。

また、少人数だからこそ一人ひとりが小笠原先生としっかりコミュニケーションを取れることが私たちの研究室の大きな魅力です。これからも小笠原先生の御指導の下、日々努力をしていきたいと思ひます。

高木研究室

半田さつき（第40期）

本研究室は、PD2名、博士課程1名、修士課程5名、卒論生3名の計11名が在籍しており、昨年度までに比べてこぢんまりとなったものの中身の充実ぶりは変わらず、個性豊かでマイペースなメンバーが揃っております。助手、OB・OGの方々からのご助言をいただきながら表情豊かな岩石と向き合う日々です。

研究テーマは構造岩石学・テクトニクスを主体とし、野外調査はもちろんのこと室内実験においても様々なアプローチを試みています。ミクロな世界（薄片スケールでの観察）とマクロな世界（野外での調査）をとびまわるようにして研究に励む様子は夏のセミにも負けません！本研究室伝統（？）の売りである「減り張り」ですが、岩石は相変わらず「メリ（脆弱）」ばかりですので樹脂でがっちり固めています。一方、人間は「メリ」と「ハリ」の量比に個人差があるものの、夏も後半に入り9月の学会発表に向けて研究室内は「ハリ」増量傾向にあります。ますます熱意あふれる研究室になるよう努力していきたいと思ひますので、今後ともよろしくお願いいたします。

小川研究室

関 瑤子、中里友梨 (第 40 期)

今年は、第 40 期生女学生のうちの半数が小川研究室に所属するという、研究室史上最も華のある年となりました。

私たちは、粘土鉱物を中心とする鉱物の従来知られていなかった物理化学的性質を解明するとともに、性質・形成メカニズムを応用して、機能性物質を創り出すことを主目的にし、研究を進めています。また、鉱物の構造を活かして、特徴的な分子構造を持つ無機有機ナノ複合材料への展開も試みています。このような研究から得られた知見をもとに、自然の神秘に迫るとともに地球環境浄化や光機能性材料などに貢献できる材料の創製に取り組んでいきたいと考えています。

ハンマーよりも白衣といった研究テーマを持ち、別宅 in 西早稲田としての生活を送ることで、小川研究室の絆(家族愛)を深めつつ、筋肉量・反射神経・シナプス量のどれをとっても学生にひけをとることがないナイスなミドルエイジドガイ、小川誠教授のもと、現在 21 名の学生が日々研究に励んでいます。

フェイガン (Fagan) 研究室

片岡 翔 (第 40 期)

2005 年に発足した我々の所属する同位体地球科学研究室は、sample に隕石(その中でも chondrite と呼ばれる物)を使用しており、各 sample の鉱物組成(mineralogy)や化学組成(bulk composition)、化学的偏差(chemical fractionation)等の情報から、sample がどのような形成過程を経たのか、どのような変成過程を経験したのかを調査するものです。主な作業としては、偏光顕微鏡による sample の組成(texture)の観察、EPMA による化学組成の調査、画像解析 software “ENVI”を使用した画像解析等になります。現在研究中の sample は、隕石内でも始原的な C chondrite と、形成過程が明確にされていない E chondrite です。

研究室内は比較的自由です。member は私の他に、何をしても怒らない人、とんかつソースよりも顔と毛の濃い奴、不細工 2 人組ユニット “W”, 外見同様中身も小便臭い小僧、大樹の守護霊よりも存在感の無い工藤美紀子の 7 人です。度胸も度量も無い奴らばかりですが、頑張りたいと思います。英語上等 I love Rock! 今夜も、Rock ' n' Roll All Night で行くんで夜路死苦☆

大師堂研究室

石川 聖 (第 40 期)

2006 年度から、地球科学専修では大師堂研究室にて卒業研究を行うことが可能となりました。現在、研究室には博士課程 2 名、修士課程 5 名、学部生 3 名(うち理工学部生 2 名)の合計 10 名が在籍しています。大師堂研の研究分野は「電波天文学」であり、15 号館屋上の 64 素子電波干渉計及び、栃木県那須の早稲田大学那須パルサー観測所において、宇宙からの電波を観測しています。

宇宙の観測をするにあたっては、数学と物理学の深い理解をベースに、コンピュータ・プログラミングやエレクトロニクスその他の技術が必要となります。また、大師堂研では、観測に必要な受信機などの製作を全て自分たちの手で行い、それらにトラブルがあった場合には自分たちで修理を行います。これは、当研究室の大きな特長であります。

地球科学専修の学生にとっては、出来たばかりの新しい研究室ではありますが、大師堂先生のご指導のもと、研究室メンバー一同、日々熱心に研究に励んでおります。

OB・OG 便り

社会人大学院と会社の間で

関根秀真（第 25 期）

学部を卒業してから 14 年目の今春、本学理工学研究科にて博士号を取得しました。思えば、社会人大学生として本学への再入学を決意してから実に 6 年以上が経過していましたが、学部時代から長きにわたりお世話になっている平野先生を初めとする地球科学専修の先生方のご指導と研究室の学生のみなさんの励ましのおかげで、何とかここまでたどり着くことが出来ました。

私は、学部から社会人大学院にて博士号を取得するまで、一貫して平野研究室に所属していました。しかし、実は古生物を研究していたのは学部卒業までで、その後は通称「リモセン組」の一人として、リモートセンシングに関わる研究を続けてきました。現在も民間シンクタンクにて、リモートセンシングを中心として宇宙開発と地球環境に関わる仕事を続けております。特に、入社以来関わっている NASA の地球観測衛星に搭載された日本の観測センサである ASTER に関わるプロジェクトにおいては、産総研の土田氏をはじめとする多くの地学卒業生の方とともに仕事をしています。また、最近も別のプロジェクトにて、“お客様”として平野研の後輩に会い、本分野での卒業生ネットワークを実感しております。

一方、最近では、京都議定書に関連した地球温暖化対策のための植林事業に関する仕事も増えてきており、昨年はマダガスカル、ラオス、今年はチリ、フィリピンなど森林が荒廃した国々にて植林事業の形成支援を行っています（実は、この原稿もフィリピンの山奥にて書いております）。まさか、シンクタンクに就職してフィールドワークをやることになるとは思っていなかったのですが、北海道でフィールドを行っていた学生時代を思い出しながら興味深く仕事をしております。熱帯の仕事が増えてくると、いつかは熱帯感染症にかかるのではないかと心配もしていますが・・・。

最後に、社会人大学院を考えている卒業生の皆様へ、正直言って仕事と研究の両立はかなりハードです（自分も最初は甘く見ていました）。しかし、久しぶりの学生生活は、何者にも変えがたいものです。ぜひとも、挑戦してください！

大学の教員になって思うこと

三次徳二（第 27 期）

ご無沙汰いたしております。みなさまいかがお過ごしでしょうか。私の方は 30 年以上過ごした東京・神奈川を離れ、大分に赴任してから 2 年半が経ちました。現在は大分大学教育福祉科学部の理科教育教室助教授として、主に理科教育の研究や教育の仕事をしています。大学の教員になって、大学生を見ると、自分の十数年前の学生時代のことを思い出すことがあります。ここでは、最近思ったことを 2 つほどあげたいと思います。

授業をしていると、まじめに参加している学生は半分くらいで、あとは寝ていたり、メールをしていたり、レポートを書いていたりと様々です。この前、教壇から自分のゼミの学生を探してみたら、ぐっすりと眠りについていました。ふと思い出すと、4 年生になったから受けた平野先生の授業で、私もよく寝ていました。あの頃、平野先生はどのように思っていたのかなどと思いながら、学生の寝顔を横目に講義を続けています。

私の勤務する国立大学では教員の削減が続いており、その穴を埋めるため、教職科目以外に、地質学、環

環境教育など現在 22 科目の授業を担当しています。昨年からは、生活環境福祉コースという教員養成以外の教室の主任を兼務し、教員研修の講師や学外出張なども多く、授業以外では学生に会えません。学生は何か話をしたそうなのですが、私の忙しそうな姿を見ると遠慮しています。何とか時間を作らねばと思い、考えた手段は飲み会でした。九州という土地柄、酒に強い学生が多いので皆集まります。飲みながら卒論の話をすることもあります。これも平野研究室に似てきましたが、違う点は、学内は飲酒禁止なので居酒屋まで飲みに行くことと、頻度が 1 ヶ月に 1 回という点です。さすがに 1 週間に 3～4 回研究室で飲んでいた平野先生には勝てませんが、これは真似しない方が学生のためかもしれません。

昔は、私も失礼な学生の一人だったのだらうなと思いつつ、今日も大学で授業をしようと思います。

専門部会報告

「鞠子正先生の喜寿を祝う会」報告（資源専門部会）

宮内 啓（第 29 期）

この 7 月 15 日（土）に早稲田大学名誉教授鞠子正先生の喜寿を祝う会がリーガロイヤルホテル東京にて開催されました。鞠子先生は、1998 年に早稲田大学をご退職され、地学専修の創設当初からその発展の礎を築くためにご尽力され、在職時にご専門の岩石学・鉱床学の分野に多大な功績を残されました。

喜寿を祝う会では、下川鉱床をデザインした特性ケーキや、卒業生による獅子舞の演舞等により、先生方、卒業生、関係者が鞠子先生の喜寿を祝いました。会の終盤には現役時の授業のようなハリのある声で鞠子先生による謡いをご披露されました。

最後に、鞠子先生ご執筆の鉱床学に関する本が近々出版されとのことでした。是非、本書を手にとって鉱床学の授業を懐かしんでみては如何でしょうか。



鉱物専門部会報告

林 政彦 (第 12 期)

去る 8 月 19 日 (土) に開催された特別講演「日本新鉱物・新産鉱物 2006」(講師:国立科学博物館地学研究部、松原聰氏) から、トピックスを紹介する。

3 年前に新潟県青海で発見された新潟石が、新しい定義によって Clinozoisite-(Sr) になってしまうこと。また、香川県小豆島の花崗岩に含まれる長さ 1mm 以下、黒褐色短柱状の褐簾石のマンガン置換体が、上田石 (Uedaite-(Ce)) という新鉱物名が与えられたこと等が特筆すべき話であった。

昨年夏からこれまでの 1 年間、我が国で発見された新鉱物は 3 種 (他 2 種可能性あり)、新産鉱物は 12 種であった。ただし、1 種 (新潟石) の名前が消えることになる。

なお、この講演会の主催は鉱物情報 (<http://www6.plala.or.jp/mineral/>) で、関心のある方は林 (e-mail: mhayashi@aoni.waseda.jp) までご連絡ください。

会計からのお知らせ

会計 加藤 進 (第 15 期)

今回の会報では、任期の途中年度ですので会計上の現状報告をさせていただきます。

現在稲門地学会会費残金は、ざっとですが 170 万円となっております。例年の主な支出項目には会報・総会開催通知・返信用葉書等々の印刷・用紙代に例年 40 万円程度要しております。またその他には新入生・卒業生に対して合計 5 万円のお祝い金を拠出しています。ですが一方で収入に関しては、卒業年次の会費と卒業後 20 年の会費による収入は例年 20 万円弱の現況で、このまま推移すれば 6 年後に会は資金的に破綻します。卒業生の皆さまには会の維持存続のために会費納入をしていただけないと今後の会の活動ができなる状況です。是非ご理解をいただきご協力いただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

庶務からのお知らせ

来る 12 月 2 日 (土) 16 時より「Restrant 西北の風」(早稲田大学大隈記念タワー、26 号館の 15 階) にて 2006 年度稲門地学会総会を開催いたします。会員皆様奮ってのご参加をお待ち申し上げます。

2005 年・2006 年度 稲門地学会役員・幹事

役員

[会 長]	坂 幸恭 (教職員)
[副会長]	原 雄 (2 期), 林 政彦 (12 期)
[庶 務]	米持 賢治 (教職員・15 期)
[会 計]	加藤 進 (15 期), 戸高 法文 (12 期)
[監 査]	平野 弘道 (教職員), 高野 良一 (1 期), 筑紫 恒男 (2 期)

幹事

[教職員]	坂 幸恭, 米持 賢治		
[1 期]	篠田 晋治, 高田 徹夫	[2 期]	筑紫 恒男, 古川 雅彦
[3 期]	川島 眞一	[4 期]	石田 吉明, 篠崎 貞
[5 期]	伊藤 和男, 酒井 健, 福田 正光	[6 期]	市毛 芳克, 三宅 克行
[7 期]	中泉 徹	[8 期]	山崎 次郎, 若林 直樹
[9 期]	稲田 敬, 池田 則生, 村野 隆	[10 期]	大橋 信介, 塩澤勝太郎
[11 期]	品田 進司	[12 期]	安藤 寿男, 戸高 法文, 林 政彦
[13 期]	泉谷 泰志, 佐野 浩, 永井 保弘	[14 期]	野々口 稔, 村松 春彦
[15 期]	加藤 進, 小池 豊, 宮下 敦	[16 期]	磯上 篤生, 宇田川義夫
[17 期]	市川 昌則, 長谷部直人	[18 期]	田中 義洋
[19 期]	金澤 義人, 古野 正憲	[20 期]	嘉戸 章江, 瀬谷 正巳, 西堀 一彦
[21 期]	風間 武彦, 加藤 潔, 森岡 右伍	[22 期]	大森 聡一, 塚田 裕子
[23 期]	堀田 照久, 安田有希子	[24 期]	安藤 生大, 小林 健太
[25 期]	荒木 康彦, 松田 達生, 三浦 玲子	[26 期]	梅田 朝美, 山上 順民, 頼 雨新
[27 期]	石井 明仁, 田島 丈年, 三輪真一郎	[28 期]	中村 一夫, 野口 眞弓, 山本 浩万
[29 期]	島田 耕史, 高橋 一晴	[30 期]	小林 靖広, 曹 奎煥
[31 期]	浅井 志保, 安藤 康行, 太田 雅仁	[32 期]	水野 崇, 桝川 直
[33 期]	馬場 恵里, 細見 幸信	[34 期]	向 充美, 吉岡 伸浩
[35 期]	今村 恭子, 井上 恭豪	[36 期]	大泉 満彦, 田中 智史
[37 期]	加納 大道, 坂 秀憲		

運営委員

[総 務]	篠田 晋治 (1 期), 木村 純 (2 期), 原 雄 (3 期), 川島 眞一 (3 期)
[総 会]	井岡 大和 (3 期), 塩澤勝太郎 (10 期), 林 政彦 (12 期), 田島 丈年 (27 期)
[名 簿]	松村 春彦 (14 期), 米持 賢治 (教職員・15 期)
[会 報]	宮下 敦 (15 期), 高橋 昭紀 (31 期)

稲門地学会

〒 169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育学部地球科学教室内

TEL : 03-3208-8473 / FAX : 03-3207-4950

http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index_j.html

e-mail : earth@edu.waseda.ac.jp

編集代表：高橋 昭紀（教職員・31 期）

編 集：宮下 敦（15 期）

題 字：大杉 徹（名誉教授）